

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 9 月 5 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13359

研究課題名（和文）識別後の肯定的フィードバック効果は目撃者の行動に影響を与えるか？

研究課題名（英文）Does post-identification feedback affect eyewitness' behaviour?

研究代表者

福島 由衣（Fukushima, Yui）

早稲田大学・人間科学学術院・助教

研究者番号：10836498

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：ラインナップから犯人を正確に選択したことを示唆するフィードバックを目撃者に与えると、その選択の正確性とは無関係に自信を高め、目撃経験に関する記憶が歪むことが示されている。この現象は識別後のフィードバック効果（以下、PIF効果）という。しかし、PIFがその後の目撃者の行動をどの程度変化させるのかはわかっていない。本研究では4つの実験を通して検討を行った。その結果、目撃記憶に対する基本的なPIF効果は再現されたが、確証的なフィードバックが、特定の行動を促すという一貫した証拠は見つからなかった。確証的なフィードバックを与えられた参加者の方が証言の記述量が多いという予備的証拠は見つかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、PIF効果が記憶に及ぼす影響だけではなく、具体的な行動に影響するかどうかを検討したものであり、この効果に関する研究領域の裾野を広げたという学術的意義がある。また、現行の刑事司法手続きに対して、適正な目撃者識別手続きの必要性を示すものでもある。本研究では、目撃した出来事に関する記憶を歪めるPIF効果の頑健性が改めて確認された。このことは、識別手続きを実施する聴取者が、目撃者にフィードバックを与えることがないよう、対策を講じる必要性を示唆している。具体的には、被疑者や当該事件の捜査状況などを知らない第三者が手続きを行う二重盲検法が有効と言える。

研究成果の概要（英文）：When eyewitnesses receive feedback implying that they have accurately identified the perpetrator from a lineup, it boosts their confidence and possibly distorts their memory of witnessing events. This phenomenon is known as the “post-identification feedback effect” (PIF effect). But it remains unclear to what extent this feedback might change the eyewitness' s subsequent behavior. We addressed this issue in four experiments. Although we replicated the basic PIF effect, we found no consistent evidence that the feedback encouraged people to engage in specific, target behaviors. We also found preliminary evidence that people who received confirming feedback submitted longer statements about their witnessed events.

研究分野：心理学

キーワード：目撃者識別 ラインナップ 誘導的な聴取者 聴取 確信度

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

目撃者が自らの記憶に対して持つ確信の程度は、裁判官や裁判員などの第三者がその正確性を推定する際の指標として利用しやすいため、これまで心理学者は目撃者の確信度に影響を与える心理的要因を検討してきた。しかし、変化した確信度の程度が目撃者のその後の具体的な「行動」に影響を与えるかどうかについてはほとんど検討されていない。目撃者の証言は、裁判官や裁判員の前で語られることによってその正確性・信用性が判断され、証拠として採用するかどうか決定される。つまり、目撃証言が法廷で審査されるためには、具体的な行動を目撃者が取る必要がある。本研究では、実験的操作によって変化した目撃者の記憶とそれに付随する確信度が、特定の「行動」の生起に影響を及ぼすかどうかについて検討し、記憶の変化と行動の生起の関係を実証的に明らかにすることを旨とした。

2. 研究の目的

Garrett (2011) によれば、彼が調査した雪冤事例 161 件のうち 57% (92 件) の目撃者は初期の識別ではまったく犯人について確信していなかったが、公判ではほとんどの目撃者が強い確信を持って犯人を識別した。このことは、初期の識別手続きから公判までの間のどこかで、目撃者の誤った確信度を上昇させる出来事があったことを推測させる。このような確信度の上昇を説明する現象の一つとして PIF 効果が挙げられよう。この現象を実験室実験に落とし込んだ研究では、複数の写真の中から目撃した人物を選択した実験参加者に、「正確な」犯人を選んだことを示唆するフィードバックを与えると、選択の正確性に関係なく参加者の目撃記憶に対する確信度を高めたり、記憶をゆがめたりすることが示されている(例えば、「いいでしょう、犯人を当てましたね!」、Wells & Bradfield, 1998)。しかし、このフィードバックが、その後の目撃者の行動をどの程度変化させる可能性があるのかはほとんど検討されていない。そこで本研究では、PIF が目撃者の供述だけでなく、行動にも影響を与えるのかどうかを検討した。

3. 研究の方法

本研究は、Amazon Mechanical Turk で実験参加者を募集し、オンラインで以下の 4 つの実験を Qualtrics 上で実施した。参加者には一人当たり\$0.40を支払い、実験手続きはすべて英語で行った。最終的に分析対象となった実験参加者は 4 つの実験を併せて 1,421 名であった。なお、すべての実験手続きは University of Waikato, School of Psychology の Research Ethics Committee の承認を経て実施された(UW1902)。

実験 1

実験刺激は Wells and Bradfield (1998)の実験で利用したものを利用し、手続もこれに準じた。

実験参加者に犯罪者が通り過ぎる監視カメラ映像を提示し、5 人の人物から成る写真ラインナップから識別手続きを実施した。ラインナップの中には実際の犯人は含まれておらず、いずれかの人物を選べば誤識別となる手続きとした。識別直後に、参加者は確証的フィードバック(“Good, you identified the actual suspect!” “いいでしょう、被疑者を当てましたね!”)、非確証的フィードバック(“Actually, the suspect is number_.” “本当は_番が犯人だったんです”)、フィードバックなしのいずれかを与えられた。その後、目撃記憶に関する回顧的記憶を評価する Wells and Bradfield (1998) の 11 項目の尺度(以下、回顧的記憶評価尺度)に回答を求めた。そして、PIF が具体的な行動を促すかどうかを測る行動指標として、実験データを裁判の証拠としてどの程度提供しても良いと思うか、供述の録音に同意するかどうかを尋ねた。本研究で使用した Wells and Bradfield (1998)の尺度項目と行動指標を、Table1 と Table2 に示した。実験 1 に参加した実験参加者は 314 名であった。

実験 2

実験 1 と手続きは同じだが、PIF が直接的に行動指標に影響していることを確実に確認するため、行動指標と回顧的記憶評価尺度の順番を入れ替えて実施した。また、行動指標には、フィードバック後に識別に関する供述を書面か録音で弁護士に提供してもらえるかどうか尋ねる設問を設けた。実験参加者は 324 名であった。

実験 3

実験 2 と同様の手続きで実施し、非確証的フィードバック条件を除外し、確証的フィードバック条件とフィードバックなし条件の比較を行った。参加者は 418 名であった。

実験 4

実験 3 と同様の手続きで実施したが、フィードバックの種類を変え、確証的フィードバック条件では“93% of them picked the same suspect in the lineup as you.” 93%の参加者があなたと同じ人物をラインナップから選択しました」と表示した。すべての参加者にフィードバック後に識別に関する報告を記述で求め、記述量を比較した。参加者は 425 名であった。

Table 1

<i>The Retrospective Self-Report Measures</i>		
	Measures	Scale
1	How good of a view did you get of the murderer? (<i>view</i>)	1(<i>very poor</i>) to 7(<i>very good</i>)
2	How many seconds would you estimate that the murderer's face was in view? (<i>seconds</i>)	open response
3	How well were you able to make out specific features of the murderer's face from the video? (<i>face</i>)	1(<i>not at all</i>) to 7(<i>very well</i>)
4	What would you estimate was the distance between the camera-eye view and the murderer's face? (<i>distance</i>)	10 feet to 70 feet in 10-foot increments
5	How much attention were you paying to the murderer's face while viewing the video? (<i>attention</i>)	1(<i>none</i>) to 7 (<i>my total attention</i>)
6	At the time that you identified the person in the photospread, how certain were you that the person you identified from the photos was the murderer that you saw in the video? (<i>certainty</i>)	1(<i>not at all certain</i>) to 7(<i>totally certain</i>)
7	How easy or difficult was it for you to figure out which person in the photos was the murderer? (<i>ease</i>)	1(<i>extremely difficult</i>) to 7(<i>extremely easy</i>)
8	After you were first shown the photos, how long do you estimate it took you to make an identification? (<i>time</i>)	1(<i>need almost no time to pick him out</i>) to 7 (<i>had to look at the photos for a long time to pick him out</i>)
9	On the basis of your memory of the murderer, how willing would you be to testify in court that the person you identified was the person in the video? (<i>willingness</i>)	1(<i>not at all willing</i>) to 7(<i>totally willing</i>)
10	Assume that an eyewitness had about the same view of the murderer that you had from the video. Do you think that an identification by this eyewitness ought to be trusted? (<i>trusted</i>)	1(<i>definitely should not be trusted</i>) to 7(<i>definitely should be trusted</i>)
11	To what extent do you feel that you had a good basis (enough information) to make an identification? (<i>basis</i>)	1(<i>no basis at all</i>) to 7(<i>a very good basis</i>)

Table 2

<i>Behavioral Measures and the Other Questions</i>		
	Measures	Scale
Experiment 1	How willing are you to offer your experimental data as evidence for an ongoing trial?	1(<i>not at all willing</i>) to 7(<i>extremely willing</i>)
Experiment 1	Would you be willing to record a short testimony of your identification and submit this audio file to be used in court?	"Yes" or "No"
Experiment 2 • 3	Would you be willing to submit a short statement to accompany your responses? You can either record it or write it. If you say yes to this question, we will help you prepare it later in this study.	"Yes" or "No"
Experiment 2 • 3 • 4	Do you give us permission to include your identification in this dataset for the lawyers?	"Yes" or "No"
Experiment 3	Of the people convicted for a crime in the US, what percentage do you think are actually innocent, in other words, mistakenly convicted?	a 0 to 100 slider scale
Experiment 3	Now if we consider all of those people who have been mistakenly convicted, what proportion of those convictions do you think involved mistaken eyewitness identifications?	a 0 to 100 slider scale
Experiment 4	Please write a statement describing how you made your identification to accompany your responses in the textbox below. It will be anonymous so do not sign your name or use other identifying information.	Total words statement
Experiment 4	Would you be willing to allow us to use this statement as testimony in the upcoming trial? Remember it will be anonymous.	"Yes" or "No"

4. 研究成果

識別後フィードバック効果の確認

実験 1 から 4 のすべてにおいて、識別した後に確証的フィードバックを与えられた実験参加者は、非確証的フィードバックやフィードバックを与えられなかった実験参加者よりも、自らの目撃記憶に関する自信や評価が高いという基本的な PIF 効果が再確認された。これはこれまでの先行研究と一致する結果である (Stebly et al., 2014)。

PIF 効果の限定性に関する示唆

実験 2 では、データを弁護士に提供しても良いか尋ねる行動指標について、確証的フィードバック条件は非確証的フィードバック条件、フィードバックなし条件よりも承諾することが示唆された。また、実験 4 では、確証的フィードバックを与えられた参加者の方が、フィードバックを与えられなかった参加者よりも多くの供述を記述した。

ただし、目撃者のその後の行動(実験データの提供意欲や陳述の提出意欲)に対する PIF の一貫した影響は見られなかった。したがって、フィードバックの影響は目撃者の回顧的報告に限定されており、具体的な行動にまでは広がらないことが示唆された。ただし、確証的なフィードバックを与えられた参加者の方が証言の記述量が多いという予備的証拠は見つかった(実験 4)。

理論的枠組みへの示唆

PIF 効果に関する手がかり仮説の説明を拡張するものである。この仮説では、目撃した出事に関連する内的手がかりが弱いほど、人はフィードバックなどの外的手がかりに影響されやすくなると考えられている (Charman et al., 2010)。手がかり仮説はまた、出来事に関連する強い内的手がかりを人々が持っているほど、フィードバックに影響されにくくなるという別の可能性も提示している。本研究では、供述の録音を求めると、当該事件に関与する重大な一歩を踏み出すかどうかを尋ねたことが、参加者の内的手がかりの精査を促したと考えられ、それがフィードバックの影響を抑制した可能性がある。しかし、このような可能性は現段階では推測の域を出ない。

司法実務への示唆

目撃した出来事に関する記憶を歪める PIF 効果の頑健性が改めて確認された。このことは、識別手続きを実施する際に聴取者がフィードバックを与えることがないように、対策を講じる必要性を示唆している。具体的には、被疑者や当該事件の捜査状況などを知らない第三者が手続きを行う二重盲検法が有効と言える。

大会報告・論文

本研究に関する主要な研究成果は下記のとおりである。大会発表 4 件(口頭 2 件, ポスター 2 件), 論文 1 本。

大会報告

- 福島 由衣・外塚 果林・遠山 大輔 (2020). 「目撃供述の信用性」に関する心理学・法律学的視点からの考察. 法と心理学会第 21 回大会ワークショップ(2020 年 10 月・於オンライン)
- 福島 由衣・Kayla Jordan・Maryanne Garry・羽入 和紀 (2022). 識別後フィードバック効果は目撃者の行動に影響を与えるか? 日本認知心理学会第 19 回大会(2022 年 2 月・於オンライン)
- 福島 由衣・外塚 果林 (2023). 再審無罪事件で目撃供述はどのように扱われていたのか? 法と心理学会第 23 回大会 (2023 年 10 月・於静岡大学)。
- Harkness, A., Douglass, A.B., & Fukushima, Y. (2023). The effects of post-identification feedback on witness and photo administrator behavior. 2024 Annual Conference of the American Psychology Law Society Conference (3 月・於 Los Angeles, United States)

論文

- Fukushima, Y., Jordan, K., & Garry, M. (2024). To what extent does post-identification feedback translate into witness behavior? *Memory*, 32(8), 959-967.

今後の展望

本研究では、参加者にデータの提供を求める質問に対する「はい」の割合が、実験 2 から 3 までのすべての条件において極めて高かったことや(85.44% ~ 96.19%), 求められた行動指標が社会的に望ましい行動であったことから、天井効果が生じたために有意差が見られなかった可能性が指摘される。

これらの可能性に対処するため、今後の研究では、共同目撃者を用いた検討が有用かもしれない。たとえば、実験参加者の目撃者をペアにし、それぞれの目撃者が同じ出来事を経験するようにする。その直後に目撃した内容について自由再生課題と真犯人が不在のラインナップ識別手続きを実施する。この時、参加者は識別判断を肯定するフィードバック、またはフィードバックなしのいずれかの条件に割り振られる。その後、参加者は自分の判断や目撃経験について共同目撃者と話し合いを行う。そして最後に、共同で供述書を作成させ、フィードバックを与えられた参加者と与えられなかった参加者で、どちらの意向の方がより多く供述書に反映されているか検討する。フィードバックを与えられた参加者には PIF 効果が生じるので確信度が高く、それ故に自らの記憶に自信があるように振る舞うことが予測されるため、フィードバックを与えられなかった参加者に対して強い影響力を持つ可能性がある。その結果、フィードバックを与えられた参加者の意見の方が共同で書く供述書に強く反映されていたり、自分の識別

の正確さについてより多く話しをしたりすることが予測される。このような手続きであれば、実験参加者にはどのような回答が社会的に望ましいかは不明であるため、社会的望ましさとそれに伴う天井効果を抑えることができるだろう。

引用文献

- Brewer, N., & Burke, A. (2002). Effects of testimonial inconsistencies and eyewitness confidence on mock-juror judgments. *Law and Human Behavior*, 26(3), 353-364. <https://doi.org/10.1023/A:1015380522722>
- Charman, S. D., Carlucci, M., Vallano, J., & Gregory, A. H. (2010). The selective cue integration framework: A theory of postidentification witness confidence assessment. *Journal of Experimental Psychology: Applied*, 16(2), 204–218. <https://doi.org/10.1037/a0019495>
- Garrett, B. L. (2011). *Convicting the innocent: Where criminal prosecutions go wrong*. Harvard University Press.
- Stebly, N. K., Wells, G. L., & Douglass, A. B. (2014). The eyewitness post identification feedback effect 15 years later: Theoretical and policy implications. *Psychology, Public Policy, and Law*, 20(1), 1-18. <https://doi.org/10.1037/law0000001>
- Wells, G. L., & Bradfield, A. L. (1998). “Good, you identified the suspect”: Feedback to eyewitnesses distorts their reports of the witnessing experience. *Journal of Applied Psychology*, 83(3), 360–376. <https://doi.org/10.1037/0021-9010.83.3.360>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Mukai Tomoya, Yuyama Yuki, Kamiya Jun, Nogami Tomoyuki, Fukushima Yui	4. 巻 2022
2. 論文標題 How Sexual Consent is Portrayed in Sex Comics (Eromanga): A Content Analysis in Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Sexuality and Culture	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s12119-022-09999-x	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Fukushima Yui, Mukai Tomoya, Aizawa Ikuo, Iriyama Shigeru	4. 巻 92
2. 論文標題 Judges' evaluation of psychological findings:	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Japanese journal of psychology	6. 最初と最後の頁 278 ~ 286
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.92.20212	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Mori Kazuo, Fukushima Yui, Uchida Akitoshi, Ito Hiroshi, Watamura Eiichiro, Naka Makiko	4. 巻 12
2. 論文標題 A Quick Guide to Applied Cognitive Research in Japan	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Open Journal of Social Sciences	6. 最初と最後の頁 414 ~ 423
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4236/jss.2024.121027	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Fukushima Yui, Jordan Kayla, Garry Maryanne	4. 巻 32
2. 論文標題 To what extent does post-identification feedback translate into witness behaviour?	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Memory	6. 最初と最後の頁 959 ~ 967
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/09658211.2024.2372384	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Harkness, A., Douglass, A.B., & Fukushima, Y.
2. 発表標題 The effects of post-identification feedback on witness and photo administrator behavior
3. 学会等名 2024 Annual Conference of the American Psychology Law Society Conference (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 尾藤 昭夫・入山 茂・綿村 英一郎・福島 由衣
2. 発表標題 心理学と法学の協働による共有可能な価値観の探求.
3. 学会等名 日本心理学会第87回公募シンポジウム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Fukushima, Y., Aizawa, I., Kurei, M., Sadamura, M., Tozuka, K., & Mukai, T.
2. 発表標題 Effects of sexual scripts on the credibility of statements in a rape case: A scenario-based study
3. 学会等名 23rd Annual Conference of the European Society of Criminology (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 福島 由衣・Kayla Jordan・Maryanne Garry・羽入和紀
2. 発表標題 識別後フィードバック効果は目撃者の行動に影響を与えるか？
3. 学会等名 第19回日本認知心理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Garry, M., Jansen, S., Oner, S., Barzykowski, K., Basnight, D., Ito, H., & Fukushima, Y.
2. 発表標題 Fostering International Collaborations between Native English-Speaking and Non-Native English Speaking Researchers.
3. 学会等名 Society for Applied Research of Memory and Cognition (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 福島 由衣・外塚 果林・遠山 大輔
2. 発表標題 「目撃供述の信用性」に関する心理学・法律学的視点からの考察
3. 学会等名 法と心理学会第21回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 福島 由衣・向井 智哉・相澤 育郎・入山 茂
2. 発表標題 心理学的知見を裁判官はどのように評価しているのか：刑事裁判判例の計量的研究
3. 学会等名 法と心理学会第21回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊東 裕司・伊藤 理香子・福島 由衣
2. 発表標題 人物同定手続き時の文脈が目撃者の判断に与える影響 捜査協力時の同時ラインナップ
3. 学会等名 法と心理学会第21回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 法と心理学会、綿村 英一郎、藤田 政博、板山 昂、赤嶺 亜紀	4. 発行年 2022年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 318
3. 書名 入門 司法・犯罪心理学	

1. 著者名 日本応用心理学会、応用心理学ハンドブック編集委員会、藤田 主一、古屋 健、角山 剛、谷口 泰 富、深澤 伸幸	4. 発行年 2022年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 858
3. 書名 応用心理学ハンドブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ニュージーランド	Waikato University			
米国	Bates College			